第一〇回 韓国社史・地誌の宝庫

中川雅彦

アジ研図書館はとりわけ、韓国の社史や地誌が揃っている。二〇〇九年三月にアジ研図書館の資料展「韓国の社史」が開かれた。この案内には次のように書かれている。

「韓国社史の収集は韓国の経済発展や企業研究のための資料として研究者の協力のもと一九九〇年代半ばから始められました。これらの資料は非売品のため入手が難しく、現地の古本屋や韓国書籍代理店を通じて継続収集に努めてきました。現在当図書館では、財閥や製造業、金融機関、新聞社などを中心に約六〇〇冊の韓国社史を所蔵しています。」

この最初の部分をもう少し詳しく説明しよう。

一九九七年のある日、当時アジ研海外派遣員としてソウルにいたわたしは、市の中心部に位置する仁寺洞道に沿った「承文閣」という古書店を訪問した。この店は日本の朝鮮史研究者の間では有名である。主人は一九六二年に店を構えたが、政財界の偉い人が引っ越しをするときに蔵書を引き取るといったことから、ゴミ捨て場に行って本を探すことまでしてきたそうである。

一九九七年は韓国の多くの人々にとって悪夢の年であった。財閥企業の倒産、株価の暴落で大変な状態となり、韓国ウォンが暴落して国際通貨基金から融資を受けるほどであった。この主人は少なからぬお金を投資信託で運用していたようであり、かなりきつい目にあったらしい。一方のわたしは、日本円でわたされる調査費（研究活動のための費用）が韓国ウォンでいきなり二倍以上に膨れ上がっていた。ふと、書棚の上のほうが気になって、梯子を借りて上がってみた。本を手に取ると、獲物を狙う猛獣のような目がこっちを見ていた。

「社史に興味があるのかい？」

「いやあ、うちの図書館に置いてあったらいいなと思って」。

主人は、これだ、とばかりに机の奥から紙を引っ張り出してきた。

「うちにある社史の目録だ。〇〇さん（アジ研OB、当時は大学教授）に頼まれて作ったんだが、何年も音沙汰ないからあんたにやるよ」。

そのときから、わたしの調査費の大部分はアジ研図書館に入る社史、地誌の購入に当てられ、承文閣の売上げに変わっていった。

そして帰国後数年間、味を占めた承文閣から社史と地誌の目録がせっせとわたしのところに送られてきた。わたしはときどきアジ研図書館に購入してもらうよう手続きをとった。何年も前から客に繰り返し店をたたむと言っていた承文閣は息を吹き返したようである。不便だからFAXを備えてくれと言っても、電話と郵便しか使わなかった承文閣は、後にインターネット販売をやるようになった。

社史や地誌を売り尽くしたらしく、承文閣はわたしのところに目録を送って来なくなった。代わりに、アジ研図書館が社史や地誌を収集していると知った別の業者たちが直接目録を送るようになったので、もう私の出番はなくなった。こうしてアジ研図書館では朝鮮語書籍のパートのなかでとくに社史と地誌が充実していったのである。

使う側に回ったわたしは社史よりも地誌を見ることが多い。朝鮮半島の主に北側の政治経済動向をみる筆者としては、ソウルで出された北朝鮮の地誌が結構役に立っている。それらは、北朝鮮出身者たちがそれぞれ出身地ごとに組織した「道民会」などで編纂されたものであり、南北分断以前の北朝鮮地域の様子がよくわかるようになっている。また、アジ研図書館では、植民地時代の朝鮮地図を閲覧することができる。この時代の地図には地名の漢字表記のみならずカタカナで現地での読み方が記載されており、各地の状況を知るうえで手がかりになることも多い。たとえば、今の行政区画にはない地名が工場名や駅名として残っている場合がたまにあり、こうした資料を見比べることによって工場の位置を特定できたりもする。

もちろんアジ研図書館は古書店にあるものばかりを集めているわけではない。平壌でも各地の地誌に関する調査研究が行われてきており、そうした成果も収集されている。韓国側の地誌だって相当な数である。

（なかがわ　まさひこ／地域研究センター動向分析研究グループ長）